

## 第9章 日本語に主語はいらないのか？

【文型論Ⅳ，無主語文】

キーワード：主格・主語・題目，無主語文・擬似無主語文・真性無主語文，動詞文・名詞文，潜在主語，省略・削除，料理文，複数名詞・人名詞，対象語格

### 1. 主格・主語・題目

A 雪が降る日に，外出した。

B 雪が降る。

C 雪は天からの手紙だ。

Aの「雪が」は、「雪が降る日に」という，時格補足語の一部であり，主語ではありえないが，「降る」という述格成分素の主体として機能している。このようなものを本書では，主格成分素，略して「主格」という。

Bの「雪が」は，主文の述語「降る」の主体として機能している。このようなものを本書では，主格補足語，略して「主語」という。

ただし，この主語は文の必須要素ではない。第6章「日本語で一番短い文は何か？」ですでに述べたように，日本語では「降る。」だけで立派な文になるからである。この点，英語の subject やフランス語の *objet* とは異なる。

意味的には，述語を構成する中核用言の意味的性質により，動作主<sup>どうさしゅ</sup>，行為主<sup>こういしゅ</sup>，状態主<sup>じょうたいしゅ</sup>，存在主<sup>そんざいしゅ</sup>などとなる。

Cの文は，A，Bの文が動詞文であったのに対して，名詞文である。名詞文は話題（主辞，subject）とそれについての説明（賓辞，predicate）とからなるが，本書では話題に相当する部分を題目部，略して，「題目」といい，説明に相当する部分を解説部という。

「主語」を上記のように定義するので，本書は，日本語にも主語は必要だという立場をとることになる。

ただし、下に紹介する、言語学者アンドレ・マルチネが提唱する主語の定義に従えば、日本語には主語がない。

主語は、他のあらゆる言語学的事実と同じで、その（具体的）振る舞いにおいてのみ、定義づけられるものだ。もし命令文、省略文以外で、ある要素が述語と不可分に現れるなら、それは主語である。この不可分性を持たないものは主語ではない。それは形（例えば語幹）や文中の位置がどうであれ、他の補語と同じく一つの補語にすぎない。

（金谷武洋『日本語に主語はいらない＝百年の誤謬を正す＝』、58頁）

## 2. 無主語文の種類

文の表面に主語（「主格補足語」の略語、以下同じ）が表現されていない文を無主語文といい、無主語文を用いた表現を無主語文による表現という。無主語文には、主語が潜在して表面化しない（潜在主語）だけのものと、主語を全く必要とせず本質的に主語が現れえないものがある。前者を擬似無主語文といい、後者を真性無主語文という。

## 3. 擬似無主語文

日本語では、主語は文の成立のための必須要素ではない。そのため、しばしば、主語を備えていない文が登場する。

a) 親譲りの無鉄砲で小供こどもの時から損ばかりしてゐる。

（夏目漱石『坊つちやん』）

b) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。（川端康成『雪国』）

c) 七月初ほうのつ、坊津ほうつにいた。往昔、遣唐使が船出をしたところである。その小さな美しい港を見下す岬で、基地隊の基地通信に当たっていた。私は暗号員であった。（梅崎春生『桜島』）

動詞を述部の中核用言とする叙述構文において動作主や状態主が明示されない場合は、動作主や状態主は、語り手または書き手である（ちなみに、疑問文や命令文では、聞き手または読み手である）。すなわち、語り手または書き手が潜在主語となる。

したがって、a)の場合、「損ばかりしてゐ」たのは、語り手の「坊つちやん」ということになる。冒頭文は上に示したような無主語文であるが、動作主・状態主は、実は『坊つちやん』というタイトルの形で読者にすでに提示済みなのである。私たちは、この情報により、動作主、状態主を「坊つちやん」と断定して読み進めているので、主語の不在に少しの不便も感じない。

勘太郎の頭がすべつて、おれの<sup>あわせ</sup>裕の袖の中に<sup>はい</sup>這入つた。

語り手が「おれ」と自称する人物であるとわかるのは、26番目のセンテンスである。しかも、正式に名乗るという形でなく、連体成分素の形でさりげなく示されている。これも、最初に『坊つちやん』と紹介しているからこそできることなのである。

c)も無主語文で始まり、それが連続する。しかし、4番目のセンテンスで語り手が「私」であると名乗り、題目の形で登場する。これは、タイトルが『桜島』という地名であるため、動作主、状態主に関する情報となりえぬので、早めに提示する必要があるからである。

なお、『坊つちやん』『桜島』で「おれ」「私」が文の表面に現れないのは、必要なものが省略されたからではない。不必要なものが削除された結果なのである。

たとえば、『坊つちやん』の冒頭を、

おれは、親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしてゐる。  
と変えてみる。原文との差は、<sup>くろうと</sup>玄人のそれと<sup>しろうと</sup>素人のそれになることは明瞭であろう。改変したものは、タイトルの『坊つちやん』の情報と重複して、べたべたしたものに変質し、江戸っ子の爽快な語り口は影も形もなくなってしまう。

「文は主語と述語とよりなる」というグラマーの記述を「まじめ」に実践し、

おれは、親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしてゐる。おれが小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。おれがなぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。

のように表現したとすると、この小説は読めたものではないということになる。動作主・状態主に関する情報の重複感は堪えがたい。原文は不必要な主語を削除したのであり、必要な主語を省略したものではないということが以上の例により理解できるであろう。

b)は「雪国であつた」という名詞を中核語とする説明語（いわゆる述語）であるから、主文は、本来主語が出現しない真性無主語文であるので、当面の課題ではない。ここで問題としたいのは、従属節中の「抜ける」の動作主についてである。

“Snow Country”のタイトルで英訳したE.G.サイデンステッカーは、冒頭文を、

The train came out of the long tunnel into the snow country.

のように「train」を主語として訳しているが、これは誤訳である。繰り返しを恐れずにいうと、日本語では、叙述文において動作主や状態主が明示されない場合、動作主や状態主は語り手または書き手である。したがって、『雪国』の冒頭文に潜在する動作主・状態主、言い換えると主語は「語り手」（4番目のセンテンスで「島村」と判明する）ということになる。

<sup>おおわ だたけき</sup>大和田建樹作詞の「鉄道唱歌」の第一節は次のようになっている。

今は 山中 今は 浜  
 今は 鉄橋わたるぞと  
 思ふ間もなく  
 トンネルの<sup>やみ</sup>闇を通つて  
<sup>ひろ の はら</sup>広野原

「思ふ」の主体が「汽車」ではありえないことは言うまでもないことであろう。『雪国』の冒頭文の構造もこれと同一なのである。いずれも、汽車に乗っている表現主体（語り手）の視点で表現されたものなのである。

擬似無主語文は軽快に自己を語る時や主語を明示しなくても文脈により自明となる場合に使用される。一方、動作主や状態主を強調したい場合や明示しないと曖昧になる場合には、主語として文の表面に明示される。

これらのほか、公共放送などで、よく耳にする擬似無主語文に、次のものがある。

d) これで放送を終わります。

本節の冒頭で述べたように、日本語では、文中に動作主や状態主などが明示されない場合は、話し手・書き手がそれにあたる。d)の表現においても、同様



である。「終わる」行為の主は話し手，アナウンサーなのであるが，これを表面化させて，

e) 私は，これで放送を終わります。

のようにアナウンスするわけにはいかないだろう。e)の表現は，個人の意志的行為を表明したものになってしまうからである。また，

f) 日本放送協会（NHK）は，これで放送を終わります。

のように，法人を動作主として明示するのも，日本語としては不自然だ。結局，擬似無主語文でゆくのがもっとも自然ということになる。

d)の文は，自動詞が他動詞のような振る舞いをするという点で有名な例文であるが，無主語文としても無視できない微妙な問題を含む例文なのである。

#### 4. 真性無主語文

あおやまふみたか

青山文啓は無主語文として，次の各文を例示している。

a) 雨だ！

b) 夜になった。

c) 星の集まりを星座という。

d) 警察で犯人の行方を追っている。

e) ほくから塾の先生に月謝を渡すね。

f) 試合開始から三分経った。

a)は名詞一語文である。名詞を中核語とする解説部（いわゆる述語）であるので，本来，格関係を構成しない題説構文の構成要素であるから，主語がないのは当然で，これは真性無主語文である。

一語文はすべて無主語文なのであるが，動詞一語文，形容詞一語文，形容動詞一語文は主語が潜在化したもので，擬似一語文となる。ただし，形容詞一語文のうち，感情形容詞・感覚形容詞一語文は，

うれしい！ 痛い！

のように，感情主，感覚主は語り手・書き手なのであるが，これらが文の表面に現れることは原則としてはない。

b)は時刻の進行の結果ある状態が成立したということの意味する文である。「なる」の状態主はトキなのであるが，トキが主語として文の表面に現れるこ

とはない。真性無主語文である。

これと同様な表現に、「春になった。／冬になった。」のような季節に関するものがある。ただし、「春／冬」の上位語として「季節」があり、「季節は春になった。／季節が冬になった。」のように主語を備えた文も可能となり、擬似無主語文と判断される。

また、「2に2を足すと4になる。／2から1を引くと1になる。／2に2を掛けると4になる。／2を2で割ると1になる。」のような四則に関する「なる」が述語になる場合も、原則として無主語文で表現される。ただし、この場合にも、

2に2を足すと和（答）は4になる。

2から1を引くと差（答）は1になる。

2に2を掛けると積（答）は4になる。

2を2で割ると商（答）は1になる。

のように主語を備えた文も可能となり、擬似無主語文ということになる。

c)は事物事象などの説明や定義に用いられる文型である。「いう」の主体はヒトビトなのであるが、ヒトビトが主語として表面化することはない。真性無主語文である。

<sup>みかみあきら</sup>三上 章の命名になる料理文も真性無主語文で、「塩と胡椒を振りかけます。」のように、動作主が主語として文の表面に現れることはない。論理的には「視聴者の皆さん／あなた」などが動作主候補として考えられるが、どのような語形であろうと、動作主を主語として明示した文は日本語としては非文になってしまう。

d)は動作主が手段・方法格デで示された文である。この場合の動作主は、「警察・国会・大学」などの組織体や「皆・われわれ」などの主体が複数であることを含意する名詞（複数名詞）でなくてはならない。d)の文のデは格助詞ガに置き換えることができるので、これは擬似無主語文ということになる。

e)は動作主が起点格カラで示された文である。この場合の動作主は人名詞でなくてはならず、また述語動詞はものや情報の移動を含意するものでなくてはならない。e)の文のカラを格助詞ガに置き換えることができるので、これも擬似無主語文といえることができる。

f)はトキの経過に関する文で、意味的にはb)に似ている。しかし、構造は異なる。f)は、

試合開始から三分が経った。

のように、「三分」というトキを主語として取り立てることができるからである。b)は真性無主語文であったが、f)は擬似無主語文である。

### 5. 名詞文で題目がガで取り立てられる場合

名詞文で題目部は普通ハで提示されるが、取り立て強調の場合はガで提示される。

「桜は春の花です。」(桜, 春の花なり。)

「桜が春の花です。」(桜ぞ, 春の花なる。)

学校文法では題目と主語とを区別しない。そのため、「桜は」「桜が」はともに、主語として扱われることになる。その結果、「桜は」が平叙表現、「桜が」が強調表現になることを説明できず、不問に付すということになっている。言わば、表現の要となる言語現象について説明不能という情けない状態にある。

本書では、格助詞は体言と用言との意味的関係の類型を示す辞とする。「桜が春の花です。」という文にはどこにも用言が使用されていない。したがって、「桜が」のガは格助詞ではありえない。このガは「桜は春の花です。」のハと同様、係助詞なのである。そして、ハは題目部を提示する提題の働きをし、ガは題目部を取り立て強調の働きをするという相違があるのである。この相違を古典語で表すと上に( )で示したようなものになる。

念のために言い添えると、題説構文は基本的に格関係を構成する構文ではないので、「桜は春の花です。」が真性無主語文であるのは当然のこととして、「桜が春の花です。」も真性無主語文なのである。

### 6. いわゆる「対象語格」のガ

ときえだもとき  
時枝誠記は、「母が恋しい。」「水が飲みたい。」などのガを対象語格を示す格助詞と認定している。確かに、「恋しい」と思う主体(いわゆる主語)や「飲みたい」と欲する主体(いわゆる主語)が何であるか容易に推察されるから、「母が」や「水が」を主語と認定するのは困難である。

ところで、「水が飲みたい。」という表現のガをヲに置き換えることも可能である。言い換えると、「水が飲みたい。」のガはヲの働きを兼務しているということになる。

一方、格助詞としてのガとヲには、「魚が食べる。」「魚を食べる。」のように全く異なる働きをする。格助詞ガが格助詞ヲの働きをしては混乱してしまう。

対象語を示すとされるガは格助詞ではない。これも取り立て強調の係助詞なのである。したがって、「母が恋しい。」「水が飲みたい。」といういわゆる対象語の文は潜在主語を有する擬似無主語文ということになる。

## ■ 発展問題

(1) 次の各文は、表現性に着目して、日本語センテンスを分類した芳賀 綏<sup>はがやすし</sup>によるものである。これらの文において、いわゆる「主語」の有無を確認し、ない場合は、擬似無主語文か真性無主語文か判定しなさい。

・述定文—表現される内容についての、話者の気持ちを表すもの

- ① 雨が降る。〈断定〉による統括
- ② 花は美しい。〈々〉
- ③ 雨が降るかしら。〈疑い〉
- ④ 君は学生か。〈々〉
- ⑤ 雨が降るだろうなあ。〈推量〉+〈感動〉
- ⑥ ぜひ会ってみよう。〈決意〉
- ⑦ 二度と買うまい。〈々〉
- ⑧ 雨！〈断定〉+〈感動〉
- ⑨ 雨だ。〈々〉
- ⑩ あらっ！〈感動〉

・伝達文—相手への伝達の気持ちを示すもの

- ⑪ 行け。〈命令〉
- ⑫ 乾杯！〈誘い〉
- ⑬ お嬢さん！〈呼びかけ〉
- ⑭ はい。〈応答〉

・述定+伝達文—表現される内容についての話し手の態度と、相手への伝達の気持ちとの両方を示すもの

- ⑮ 雨が降るよ。〈断定〉+〈告知〉

- ⑯ 雨が降るわよ。〈断定〉＋〈感動〉＋〈告知〉  
 ⑰ 雨が降るだろうね。〈推量〉＋〈もちかけ〉  
 ⑱ 雨？〈疑い〉＋〈もちかけ〉

(2) 次の「花が」の相違について考えなさい。

- a 花が咲いている。  
 b 花が綺麗だ。  
 c 花が好きだ。  
 d 花が買いたい。  
 e 花が売っていない。  
 f 花が売れている。  
 g 花が売れますか？  
 h 花が満開だ。  
 i 花が種子植物の有性生殖にかかわる器官だ。

(3) 「主語」の定義にはどのようなものがあるか調べてみよう。

## ■ 参考文献

- 1) 金谷武洋『日本語に主語はいらない＝百年の誤謬を正す＝』（講談社，講談社選書メチエ 230，2002）
- 2) 三上 章『象ハ鼻ガ長イ』（刀江書院，1960，くろしお出版，1960）
- 3) 三上 章『続・現代語法序説＝主語廃止論＝』（くろしお出版，1972）
- 4) 亀井 孝・河野六郎・千野栄一『言語学大辞典6 術語編』（三省堂，1996）
- 5) 青山文啓「日本語の主語をめぐる問題」『日本語学』4月臨時増刊号9巻（明治書院，2000）
- 6) 時枝誠記『日本文法 口語篇』（岩波書店，1950）
- 7) 芳賀 綏『日本文法教室』（東京堂出版，1962）
- 8) 北原保雄『日本語の世界6 一日本語の文法一』（中央公論社，1980）
- 9) 尾上圭介「文法を考える1 主語(1)～(4)」『日本語学』16巻10号～17巻3号（明治書院，1997～1998）
- 10) 小池清治『日本語はどんな言語か』（筑摩書房，ちくま新書，1994）
- 11) 小池清治『現代日本語文法入門』（筑摩書房，ちくま学芸文庫，1997）
- 12) 小池清治『シリーズ日本語探究法① 現代日本語探究法』（朝倉書店，2001）

著者略歴

こいけ せいじ  
小池 清治

(第1～9, 14章担当)

- 1941年 東京都に生まれる
- 1971年 東京教育大学大学院博士課程  
単位取得退学
- 1971年 フェリス女学院大学専任講師
- 1976年 宇都宮大学教育学部助教授
- 現在 宇都宮大学国際学部教授

あかばね よしあき

赤羽根 義章

(第10～13, 15章担当)

- 1958年 愛媛県に生まれる
- 1986年 宇都宮大学大学院修士課程修了
- 1992年 愛知教育大学専任講師
- 1996年 宇都宮大学教育学部助教授
- 現在 宇都宮大学教育学部教授

シリーズ〈日本語探究法〉2

文法探究法

定価はカバーに表示

2002年10月1日 初版第1刷  
2007年2月25日 第3刷

著者 小池 清治

赤羽根 義章

発行者 朝倉 邦彦

発行所 藍朝倉書店

東京都新宿区新小川町4-29

郵便番号 162-8787

電話 03(3268)8282

FAX 03(3268)8288

<http://www.asakura.co.jp>

〈検印省略〉

©2002 〈無断複写・転載を禁ず〉

ISBN978-4-254-51502-2 C 3381

教文堂・東京製本

Printed in Japan